

100人のNEWS

No. 169

【発行・編集】
教育再生
地方議員百人と
市民の会

事務局 増木重夫
大阪府吹田市古江台
2-10-13
TEL090-3710-4815
FAX06-6835-0974

<http://www1.ocn.ne.jp/~h100prs/>

教科書から「従軍慰安婦」という文言を未来永劫消すために

米下院外交委員会における「慰安婦」決議案の採択に抗議します

2007年6月26日、米下院外交委員会は、慰安婦問題に関する対日非難決議案を可決した。この決議案は、我が国の首相に対して公式謝罪を要求するものであった。私たちは日本の地方議会議員は、日本の最も重要な同盟国であるアメリカの下院外交委員会の多くの皆さんが、この決議に賛成したことを知り、驚きと衝撃を受けた。同時に、私たちは怒りと悲しみを禁じ得ない。この慰安婦問題に関する決議案は、歴史的事実とは全く異なる誤った情報に基づき可決されたからである。かつての日本軍の周辺には、世界の他の軍隊と同様、兵士たちを相手に商売をする売春婦が存在し、そのサービスを提供する組織と場所が存在したが、性奴隷などという存在は全く無かったからである。存在したのは、軍人相手に金を儲けようとする売春組織と売春婦のみであった。これが紛れもない歴史的真実である。

米下院議員の皆さんにお願いしたい。アメリカ合衆国の誇りと名誉にかけて、誤って認識された慰安婦問題について、どうかもう一度、歴史的検証をしていただきたい。厳密な調査をしていただければ、性奴隷などという存在がなかったことが明かになるだろう。その上で、この決議を再検討し、撤回していただくことを私たちは希望する。

名誉と誇りを重んじる日本国民として、また、自由と民主主義を共同の価値とする同盟国の国民として、アメリカ下院議員の皆さんに、以上、強く要求するものである。

参議院議員選挙候補予定者（百人の会顧問）

- 比例区 米田建三
京都 西田昌司
和歌山 大江康弘
兵庫 鴻池祥肇
- ご支援をお願いいたします。



慰安婦問題の歴史的真実を求める日本地方議員の会

- 発起人代表：杉並区議会議員 松浦芳子
発起人：千葉市議会議員 宍倉清蔵
豊島区議会議員 吉村辰明
発起人：柏崎市議会議員 三井田孝欧

- 発起人：函南町議会議員 植松和子賛同議員：天目石要一郎 武蔵村山市議員 犬伏秀一大田区議員 三宅博八尾市議員 土質壯志日野市議員 渡辺眞日野市議員 中田兵衛豊島区議員 本橋弘隆豊島区議員 村上宇一豊島区議員 竹下ひろみ豊島区議員 堀宏道豊島区議員 松原成文川崎市議員 工藤裕一郎横浜市会 桜井秀三松戸市議員 中村実船橋市議員 西村幸吉千代市議員 上橋泉柏市議員 金子正市川市議員 三橋弘明茂原市議員 添田隆晴伊勢崎市議員 児玉豊島区議員 新井英生足立区議員 森篤伊東市議員 鈴木正人埼玉県議員 小島健一神奈川県議員 小坂英一荒川区議員 森篤伊東市議員 波多洋治岡山県議員 二瓶文隆中央区議員 石本たかし岩国市議員 伊藤純子伊勢崎市議員 島崎義司武蔵野市議員 浅川喜文荒川区議員 近藤充八王子市議員

いま増加中です。

私たちが発起人は貴議員にも賛同議員になって頂きたいとお願ひするしだいです。

是非、松浦芳子まで応諾のメール・FAXをお送りください。

杉並区議会議員 松浦 芳子
info@matsuyura-yoshiko.com
TEL・FAX:03-3311-7810

地方議員各位
発送予定 7月7日
大至急松浦議員まで111連絡下さい

許せないロシアの蛮行

ありもしない「従軍慰安婦」が非難されるなら、ロシアはその千倍も万倍も非難されなければならない

●従軍看護婦団の悲壮なる自決

昭和二十一年六月、ソ連占領下の満州の長春でソ連軍の蛮行に抵抗して純潔を守り抜いた従軍看護婦の集団自決は、その中の一つの事実であるが、あの時期における全ての受難同胞を代表して実に見事に日本人の魂を犯すべからざる威厳を示した、永遠に語り継がれるべき悲歌である。

○卑劣なる悪魔の毒牙

八月九日、突如ソ連軍の侵略が開始されるや、満州東部国境に近い虎林の関東軍野戦病院に勤務していた堀喜美子婦長以下三十四名の従軍看護婦は移動を命ぜられ、今の長春に辿り着いた。一転して虜囚の身である。明けて二十一年の春、城子溝にあるソ連の病院から三名の看護婦を応援に派遣せよという命令が婦長に伝達された。

看護婦長堀喜美子さんは「ふっと曇った胸に不安の黒雲が段々広がっていった」と言っている。ともあれ、命令には応援は一月月でよい、月給は三百円を支給するところがあるが、この危険を感じる所へ誰を送るか。婦長は大島はなえさん、細井たか子さん、大塚てるさんの三名を漸く選び出した。不運な白羽の矢を立てられた三名はそれでも極めて元気に一月月のお別れ告げで出掛けに行つたが、予定の二ヶ月を過ぎても帰って来ないうち、また三名の看護婦追加の申し込みが来た。やむを得ず、荒川静子さん、三戸はるみさん、澤田八重子さんの三名が第二回目の後続として送り出された。その二ヶ月経つた二ヶ月経つたが誰一人として帰って来ない。そこへまた第三回目の命令である。そして四回目を申し込んで来た。

もはや我慢の限界であったが、しかし敗れた者の情なさ、とつすることも出来ない。やはり送る外ないと、四たび三名の女性が選ばれ、月曜日の午前中に出発することになった。それは六月十九日土曜日の夜であった。堀婦長が憂鬱な人選を終え八時過ぎに病院を出ようとした時、よろめき倒れかかって来た傷だらけの女性がある。よく見ると、何と第一回に派遣した大島はなえ看護婦ではないか。手当たりが危険は刻々と追って来る。

「私たちはあちらでは看護婦の仕事させられていたのではありません。行った日からソ連将校の慰みものにされてくるのです。每晚三人も四人もの将校がやって来るのです。私も殺されるくらいはかまいませんが、次々と同僚の人たちがやって来るのを見て、何とかして知らせなければと考えましたので、脱走して来たのです」というのでした。その時撃たれたのでしよう、十一発の銃創の外に、背中に鉄条網をくぐって来たかすり傷が十数本、血を流して、みみずばれに腫れています。「婦長さん！もう後から人を送ってはいけません。」「という言葉を最後に、息をひき取りました。

○死をもって守る乙女の純潔

翌日、別にあてがわれている合宿所から一人も出勤して来ない。婦長は、ハッとして夢中で三階の看護婦室に駆け上がった。そして見たものは、二十二名の看護婦がズラリと二列に並んで眠っています。しかも満州赤十字看護婦の制服に制帽姿で、めいめい胸のあたりで両手を合わせて合掌しているではありませんか。脚は紐できちんと縛ってあります。もう冷たくなっているのです。(中略)

その遺書にはこう書かれていた。

「二十二名の私たちが自分の手で命を断ちます。私たちは敗れたりとはいえ、かつての敵国人に犯されるよりは死をえらびます。たとい命はなくなりますが、死ななによりも、この後に全員の名前がそれれぞれの手で記されてあった。

○この壮絶に鬼も哭け

その後、たまたま彼女らがダンサーをしているというところを知った。早速訪ねて行くと、いかにもナイトクラブのダンサー然としているが、顔は病人のように蒼白である。「早く私どもの所に帰って来て」と言うと言を横にふるばかり。「あなた達はそんなことを好きでやっているのね。」と罵って三つぱかりひっぱたいた。涙ながらに言うには、「ソ連の病院に送られた時から、私たちは毎晩七八人のソ連の将校に犯されたので、すぐに国際梅毒をつつされました。私も看護婦です。今では大分悪化していることがわかります。こうなるとは自分の体は屍に等しいのです。

どうしてこの体で日本に帰れましようか。この性病がどんなに恐ろしいものか十二分に知っています。暴行の結果うつされたこの性病を私はソ連軍の一人でも多くうつしてやるつもりです。今は歩行も困難なくらいですが、それでも頑張って一人でも多くのお客をとることにしています。これが敗戦国のせめてもの復讐です」

決然といいはる彼女たちに帰す言葉もなく別れた婦長は、病院中の性病の薬を集めてキャバレーに届けさせた。しかし、彼女たちは「日本の人たちが作ったこの薬品、こんな貴重な薬品をいただいているは申し訳ない。ソ連軍からうつされた私どもの病気を日本人の作った薬で治すのは勿体ない」と言って受け取らない。そして重ねて訪ねて行った婦長に、「その御親切を無にするわけをお見せしましょう。」と自分たちの部屋に案内して患部を見せた。制止できない症状。コンジロームが局部一杯に広がってその先が全部化膿して膿が流れ、無花果(いちじく)の腐敗したのを見るような感じに、長年看護婦をして馴れているはずの堀さんにも全身総毛立ちの寒気がしたという。

堀喜美子著「従軍看護婦の集団自決」より
全文を1/3に略しました。全文は
<http://midpart.jp/siryu/siryu-top.htm>